

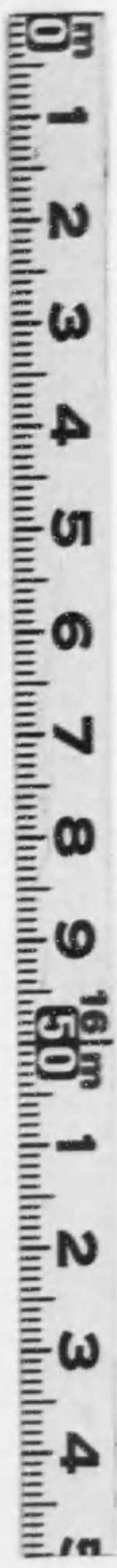
特118

49

關東大震大火災記

帝都復興協會編

国立国会図書館



始

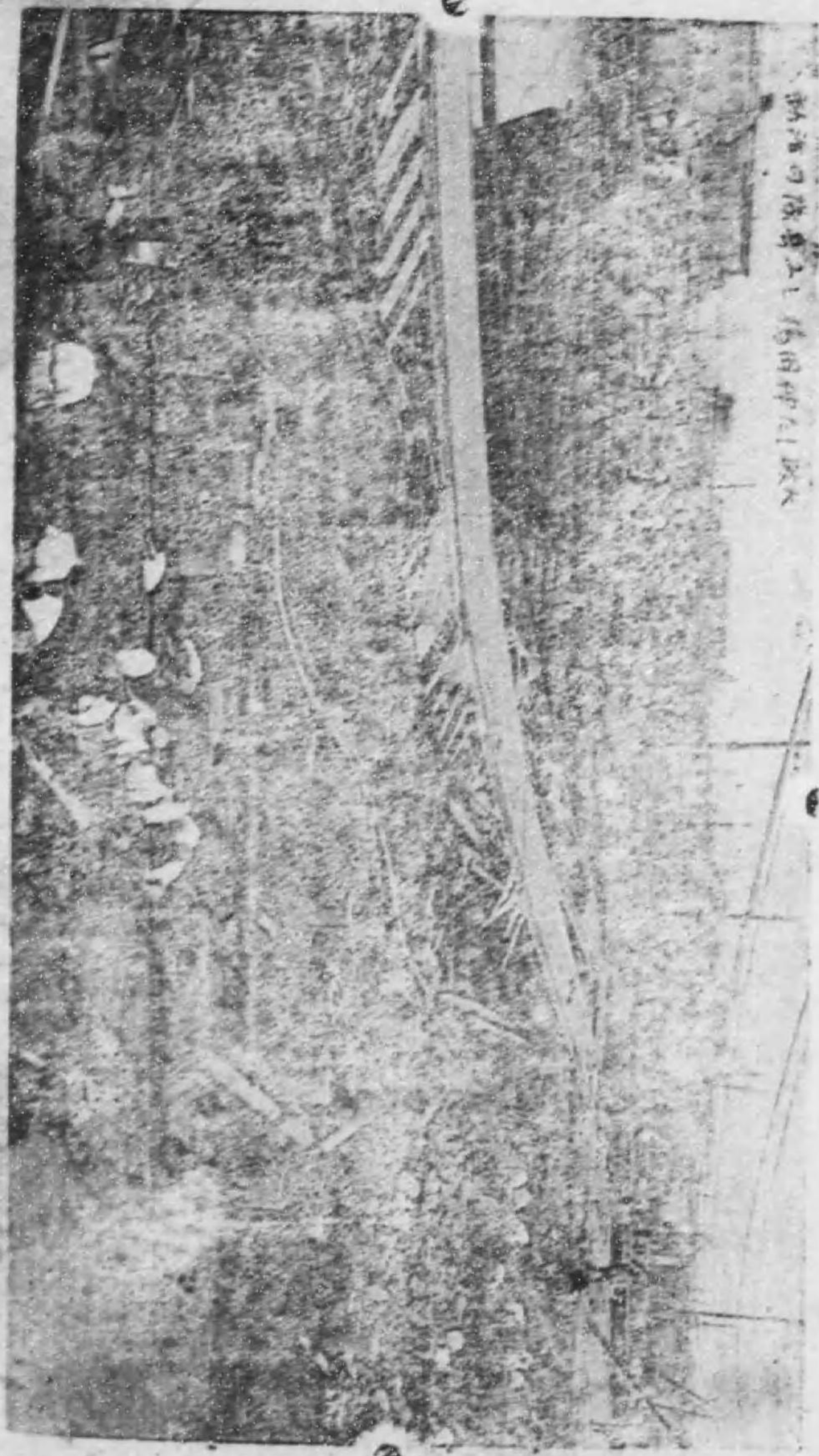


帝都復興協會編

關東大震災大火實記



特118
49



新田町落第入上馬田中川原

關東大震大火實記

帝都復興協會編輯部

一、嗚呼大正十二年九月一日午前十一時五十八分！

僅々十八時間にして帝都大東京焦土と化す！

嗚呼大正十二年九月一日午前十一時五十八分！この時刻こそは東京市民の……否我が日本國民の永久に忘るゝことの出来ない無限の痛恨を刻みつけた時刻である。三百年の文化の華、大江戸の昔から營々として築き上げられた世界屈指の大都會、東洋一の文化の都我が大東京は、この記憶すべき時刻に於て、突如、開闢以來未曾有の大震災に襲はれ、巨萬の費と建築の粹を盡し、輪環の美を極めたる大厦高樓相踵いで倒壊し、火災は全市八方

に起り、濛々たる黒煙は天空を蔽ひ、炎々たる大火焰は天を焦し、満都忽ち火の海となり僅々十有八時間にして大帝都の大部分を灰燼に歸し、一望唯だ茫漠たる焦土と化せしめた嗚呼大正十二年九月一日午前十一時五十八分！ 何たる呪はしき時刻であらう！ 何たる痛恨限りなき時刻であらう！

而も今度の大地震大火災と關聯して、吾人の心に或る一大衝激を與ふるものは、今より十八年前に於ける、帝國大學教授今村恒恒博士の東京大震災豫言である。即ち、博士は、明治三十八年『地震學』と題する一書を著はし、地震學の權威と稱せらるゝ大森博士の數百年説に反對し、地震地域内にある東京市は平均百〇三年で大地震がある、現在の建物並に水道設備では必ずや全市焦土と化するであらう』といつた。この戰慄すべき今村博士の學説は、驚くべき獨斷として、大森博士を始め都下の新聞から、猛烈なる包圍攻撃を受け文部省からも取消を注意された程で、一世の物議を醸した。而して博士の學説は何等根據のない獨斷として葬られた。然るに果然、今や博士の豫言は見事に的中し、僅か十八時間

にして全市焦土と化してしまつた。吾人は博士と共に、博士の學説が的中して大森博士の學説の破れたことを泣き悲しまざるを得ない。然しながら、事實は最早如何ともすることが出来ない。眩きばかり文化の花咲き亂れた大帝都の壯麗は今や三百年前草茫々の武藏野時代よりも傷ましく淺間しく悲しき姿となつてしまつたのである。

二、災禍襲來刹那の光景

忽ち來る全市の大慘狀

此日は恰度農家の大厄日たる二百十日に當つて居たので、中央氣象臺では其前日の八月卅一日の午後に警報を發して警戒を促がしたが、東京地方では夜明前の午前三時頃に一寸風雨を催しただけで、四時にはそれも静まつてガラリと晴れ、初秋の曙は麗らかなもので

あつたので、この分ならば一日の大厄日も平穩無事に終るであらうと人々は悉く安心して居た。

斯くて時はズン／＼進んで八時、九時となり、十時、十一時と過ぎた。大なる天災バルチザンの襲來が眼前に切迫して居ようとは知る由もない神ならぬ人々は、或は午餐の支度に取りかゝつたり、或は支度最中であつたり、或は清く一同食卓に向つたばかりであつたり、早い家では中食を終つたばかりであつたり、或はまた業務に熱中して晝食の事も忘れて居たりしてゐた。かくて各戸の時計の針が正午二分前の午前十一時五十八分を指すや、俄然、何處からともなく異様な音響が起つた、同時に大地は波打つ如く上下に大震動を初め、ソレ大地震だ！と思ふ間もなく、大激震となり、すさまじい音響と共に、家根々々の瓦は小石の如く振ひ落され、柱は折れ壁は碎け、木造、石造、煉瓦、鐵筋コンクリートのあらゆる大小新舊の建物は、まるでマツチ箱を揺り倒し、叩き潰すやうに、譯もなく倒壊し崩潰し粉碎し、土砂の煙が天に沖するがと見れば、忽ち火災は八方に起り、彼處にも此

處にも紅蓮の焰は黒煙と共にベロ／＼と立ち昇り、阿修羅の如く家より家へと燃れ移り燃え廣がり、風に煽られて數丁或は數十丁に互る大紅蓮、が楯比した町街をさながら枯草を焼いて行くやうに焼き拂つてゆく有様は、只もう火の海嘯といふの外はなかつた。

三、先づ七十六個所に猛火起り

瞬時にして全市焦熱地獄となる

大音響と共に大厦高樓相踵いて倒潰し、無數の中小家屋粉碎すると同時に、猛火の巷となつた處は、全市實に七十六個所であつた。中にも最も皮肉で、そして此の大災變に際して多大の不便不利を與へたのは、都下警察の總本山、魏然として日比谷原頭に聳り立つたあの赤煉瓦の大建築警視廳が、先づ第一に猛火の渦巻に吞まれたことであつた。警視廳裏手の方から燃え上つた火の手は、有樂町二丁目の一角から三丁目に移り、警視廳を中心と

六
して輪焼の美を極めた帝劇を焼き東京會館を焼き、あの附近一帯の諸會社を一紙めにし
て數寄屋橋方面に向ひ忽ち有樂座を灰燼にして對岸に燃え移り、赤坂田町新町方面に起つ
た猛火は山王下の電車通りを二手に分れ、一手は北に延びて赤坂見附方面に向ひ、一つ木
町、田町二丁目に及び、他の一手は溜池兩側を枯草の如くまた、く間に焼き盡し虎の門に
出で、虎の門から更に二方面に分れ、一方は虎の門公園、東伏見宮邸によつて辛うじて食
ひ止めたが、他の一方は右に延び、米國大使館を焼き拂つて、靈南坂に上り、西久保巴町
櫻川町方面に延焼し、京橋方面では銀座裏手の宗十郎町銅町附近に最初の燄の舌が現はれ
一方は山城町河岸から八番町方面を舐め、他の一方は尾張町方面に向ひ、更に二手に分れ
一方は折からの烈風に煽られて京橋方面に暴威を揮ひ、銀座四丁目角から大商店軒を並べ
た大通の兩側を焼き拂ひつゝ、京橋に迫り、更に橋を越えて南傳馬町に出て、第一相互館、
星製藥等の大建築を焼き、其處で又火の手は分れて東に進み、農商務省を焼き、築地精養
軒を灰にし逓信省に燃え移つて汐留驛を包圍し、新橋の南北脂粉の香漂ふ花柳界も瞬時に

して舐め盡し、更に愛宕町方面に進んで、赤坂から燃進して西久保を焼きつゝあつた火と
合し、猛然芝公園に蔓延し、愛宕署、政友會本部、赤十字社等を片つ端から焼き拂ひ、増
上寺の周圍の一角を残して漸く鎮火した。

これだけなら全市焦土と化するやうな大惨害は起らなかつたであらうが、恐るべき猛火
の勢は更に恐るべき結果を生み、全市を火の海たらしむるやうなことになつてしまつた。
それは日本橋方面に起つた猛火である。同方面は先づ本石町に第一の火焔が上り、其猛火
は恐ろしい勢で直ちに本町方面を襲ふた。何しろ此の方面には大きな藥品問屋が野を並べ
て居り、其の各倉庫には有らゆる爆發性を有する藥品が山積されてあつた、ところが其倉
庫に火が移つたのだから堪らない、忽ち轟然たる大音響と共に倉庫内の藥品は悉く爆發し
濺々たる爆煙は天に沖し、凄じい爆音は天地を震蕩し、倉庫の屋根や壁などはコツパ微塵
に粉碎されて爆煙と共に空中に飛散し、奈落の底から吹上つて來るかと思はれる物凄じい
大黒煙と共に灸々と渦巻き上る數十丈の大火焔大火柱は、全市民の心膽を氷の如く寒から

しめずにはおかなかつた。そして其物凄(そのものすさまじ)い猛火(もうくわ)は燎原(れうげん)の火(ひ)の如(ごと)く四方(はう)八方(はう)に暴威(ばうゐ)を逞(たくま)ふし、さしも股賑(おんしん)を極(きま)めた帝都(ていと)商區(しょうく)の中心(ちゅうしん)日本橋區(にっぽんばし)を僅々(じんじゆん)數時間(すうじかん)にして總砒(そうび)めに砒(な)め盡(つく)してしまつた。

神田方面(かんだ)では三崎町(みやまき)と錦町(にしん)方面(ほうめん)より發火(はつか)し、一方(はう)は日本橋方面(にっぽんばし)に延び(の)びて本町(ほんまち)の猛火(もうくわ)と連絡(れんごく)し、他の一方(はう)は鍛冶町(かぢ)須田町(すだ)一帶(いたい)を總砒(そうび)めに燒き拂(はら)ひつゝ、柳原河岸(やなぎはら)から和泉橋(わいずなばし)に向(むか)ひ、更に淺草方面(あさくさ)にドシ／＼燃(も)れて行(い)つた。猶(なほ)は他の一方(はう)の火(ひ)の手(て)は堀(ほり)を越(こ)えて丸の内(まるの内)に入り、稅務監督局(ぜいむくんとくきょく)、大藏省(だいざんしょう)、內務省(ないむしょう)を始め、大手町(おほて)通り(どおり)を片(いた)つ端(はし)から燒き拂(はら)ひ、雉子橋方面(けしごばし)に至(いた)つて文部省(ぶんぶしょう)を燒き、更に飯田町方面(いひだ)に及(およ)び、三崎町方面(みやまき)の火(ひ)と錦町方面(にしん)の火(ひ)は、挾擊(けつげき)的に猿樂町(さるがく)神保町(じんぼ)小川町(おがわ)等の一帶(いたい)をマツチ箱(まつちば)を燒(や)くかのやうに燒き拂(はら)つてしまつた。

また麴町區(こうじま)では三番町(さんばん)中六番町(ななご)方面(ほうめん)先(ま)づ第一(だいいち)に火(ひ)の海(うみ)となり、火勢(くわせい)は漸次(ぜんじ)上(かみ)六番町(さんばん)下(しも)六番町(さんばん)に延燒(えんせう)し、半藏門(はんざんもん)を突破(とつぱ)して英國(えいこく)大使館(たいしきかん)を半燒(はんせう)とし、隼町(はやぶさ)に移(うつ)つて漸(や)やく火勢(くわせい)衰(おとろ)え、

小石川方面(こいしかわ)は水道橋畔(すいどうばし)の砲兵工廠(ほうへいこう)先(ま)づ崩潰(ほうくわい)して火(ひ)を發(は)つし、彼の數丁四方(たうぢう)の大建(だいけん)築物(ちくぶつ)は一部(いぶ)を残(のこ)して見る／＼大火焰(たいくわん)に燒き落(お)され、飯田橋方面(いひだばし)に進(すす)んで飯田町方面(いひだ)の猛炎(もうえん)と合(あ)して更に一層(いっそう)の狂暴(けうぼう)を逞(たくま)ふし、遂(つひ)に神田三崎町(かんだ)の火(ひ)と合(あ)して、あの附近(かきん)一圓(いっぴん)を悉(ことごと)く總砒(そうび)めに砒(な)め盡(つく)した。

下谷方面(したや)では、三の輪(わ)三河島方面(さにかわ)より燃(も)え上(あ)つた火(ひ)の手(て)は電車通(でんしゃどおり)の兩側(りやうがは)を燒き拂(はら)ひつゝ、坂本町方面(さかもと)に進(すす)み、三の輪(わ)金杉下町(かなすぎ)を舐(な)め、車庫側(くるまぐら)を進(すす)んだ火(ひ)の手(て)は必死(ひつし)の消防(せうぼう)によつて金杉下町(かなすぎ)と上町(かみまち)の境界附近(けいがい)で辛(から)くも喰(く)ひ止(と)めたが、反對側(はんたいがは)の火(ひ)の手(て)は三島神社附近(しみんじ)で龍泉寺町(りゅうせんじ)入谷町(いりや)を一息(いっくわ)に燒き拂(はら)つて來(き)た猛火(もうくわ)と合(あ)して益々(ますます)猛烈(めうれつ)を極(きま)めた。

四、名物十二階の高塔崩落し

火の煙突となつて猛焰を吐く

浅草方面では、新吉原廓内に於て、一時に七箇所より火を發し、忽ちにして火の海と化し、遊治郎の魂を蕩かした三千の娼妓は勿論、數千の廓内の住民は四方の通路から廓外に通るべく右往左往に、走り、叫び、喚く有様は、到底名狀すべくもなかつた。中に猛火に追はれて逃げ場を失ひ、廓内公園に集つたが、其處にも魔の如き火の手は延び、遂ひに一千五百餘名の惨死者を出すに至り、池はそれ等の死體によつて埋められた。

一方、東京名物の一つとして知られた浅草公園の十二階の高塔は、大激震と共に九階より崩壊墜落し、忽ち火災を起して、火の煙突となつて猛焰を吐き、附近の劇場、活動寫眞館に燃え移り、公園六區一帶の建築物を焼き拂ひ、更に八方に延焼して、一方は千束町を

進んで吉原の猛火と合し、他の一方は新谷町、柴崎町、田島町方面を焼いて下谷方面に進み、又他の一方は傳法院を焼き俵町、仲町、雷門方面に進み、駒形町方面に向つて高等工業學校、互斯會社、厩橋稅務署等を舐めて厩橋方面に進んで來た火の手と合し、更に下谷竹町、七軒町方面一帶を海嘯の如く焼き拂ひ、又一方は吾妻橋を焼きつゝ、隅田川を渡つて本町の猛焰に合し、更に一手は馬道及び花川戸大通りの兩側を焼きつゝ、南千住方面に押進み、吉野橋田中町附近に於て吉原から出て地方今戸一帶を舐め進んだ火の手と合し、渦を巻きつゝ、ひた押しに燃え進んだ。

五、猛火相合して一大旋風を起し

全市中最も酸鼻を極めた本所深川

今次の大震災中最も悲惨を極めたのは、何と云つても本所、深川の兩區であつた。深川

二二
方面は先づ第一に洲崎遊廓より火災起り、次で東森下町、猿江町の兩方面に發火し、阿修羅の如く八方に燃え廣がつたが、此時本所方面は工業地の事として、工場の倒潰、化學藥品の爆發等の爲め火災は四方八方に起り、全区火の海となつて居たので、双方の猛火の衝突合體は忽ち突風となり、更に一大旋風となつたので、大火焔は見る／＼數十呎の大火柱となつて天に沖し、火勢最も慘烈を極めた。隨つて深川本所兩區民は火の嵐に追ひまくられながら、東に西に南に北に逃げ惑ひ走り廻つたが、最初に永代橋、新大橋、既橋、吾妻橋と渡つて上野や芝方面に避難したもの、及び寺島、吾妻、龜戸、大島方面に通れたものは助かつたが、逃げおくれたものは悉く焼死或は河中に落ちて溺死してしまつた。

橋上より降る人の雨

隅田川大川の水面惨死体て蔽はる

本所、深川兩區がどうして他區に比して最も慘状を呈し、死者數萬を出すに至つたかといふに、それは全区到る處に火災起り、非常に早く火の手が廻つて逃道を塞がれてしまつたといふのも其一理由であるが、兩區民は大體二つの方面に避難した、即ち兩區を横斷する大下水大横川以北の中ノ郷、業平町、太平町、柳原町、東町、石島町以北の人々は寺島吾妻、龜戸、大島、砂村などの郡部に避難したが、其以南の人々は多く、隅田川の方面に逃げた。ところが變時はもう對岸一帶悉く火の海となつて、橋を渡つて見た所で、火の中へ飛込むやうなもので、到底助かることは出来なかつた。そして其時は橋に近い町の人々は逃場を失ひ荷物を持つて橋の上へはいに避難して居た、そこへ火に追はれた幾万の人が押かけたので、橋の兩端に居たものは押出されて水中に磔の如く轉落した。就中最も悲惨を極めたのは既橋に通れた人々で、橋上人と荷物で身動きだもならぬ程に埋まつて居たとき、火は中程の橋桁に燃え移り、見る／＼數間は數百の人諸共に焼け落ちたが、それとも知らず兩方から押しまくつたから堪らない、中程に居た人々は否應なしに押落され

た、後方の人々はそうした惨劇が橋の中央で起つて居ると知らなかつたのと、猛火に迫はれた恐ろしさで、無我夢中で三十分間も押落して居た。其うちに橋桁についた火は、橋の下側から焼いて行つたので、橋上の人々は絶體絶命、或は自ら河中に飛び込むもの、或は橋桁と共に焼け落ちるもの、數百數千の老若男女は兩の如く河中に降り、悉く溺死してしまつた。そしてさういふ人の雨は厩橋のみでなく、永代橋からも、新大橋からも、兩國橋からも、吾妻橋からも降つた。其屍體と兩海岸から火に追ひ詰められ飛び込んで死んだ者の屍體とで、さしにも広い隅田川の水面も一ばいになつた。

六、被服廠跡の避難者悉く焼死

黒焦死體となつた三萬二千人

本所区内一面火の海となるや、相生町、龜澤町、石原町、緑町、二葉町、横綱町一帯の

人々は、兩國停車場の北方、龜澤町電車通に添ふた被服廠跡の廣場に避難した。何しろ同所は陸軍被服本廠跡で三萬坪からの広い空地なので、この廣場こそ安全地帯だと、荷物を持つて我も〜と雪崩の如く逃げ込んだ。其うちに猛火は海嘯の如く四方から押し寄せ、流石に広い被服廠跡も人と荷物で身動きも出来ないやうになつてしまつた。數萬の避難者は安全な場所と思つて逃込みはしたものの、餘りに火勢が物凄いで生きた心地もなかつた。火は益々激しくなつた、突風に吹いで捲き起つた一大旋風は、まつたく恐ろしい勢で數十丈の大火焔大火柱を捲きあげ捲きおろし、忽ち電車通は一面火になつてしまつた、北方の石原町方面一帯を焼き拂ひつゝあつた火の手は、見る／＼隣接の本所郵便局及び其の附近の大小の建物を一疋めに舐め初めた。南の方は兩國停車場になつてゐるが、これも炎にたる焔に包まれ、三方、悉く火になつてしまつて、その三方の焔は大渦を捲いて廣場の上を襲ひ、無数の火の粉は群がる避難者や荷物の上に雨の如く降り注いだ。さあ事だ、安全地帯だと思つて逃げ込んだのが今や安全地帯どころか、三方から猛火に攻め立てられる。

焦熱地獄となつた。ワー／＼騒いでゐるうちに降り注ぐ火の粉から忽ち荷物に火がついた。それが一つが二つならば揉み消しも出来るが、彼方にも此方にも火の粉の降る處、荷物の在る處、殆んど悉く火がついた。數萬の群集はもう煮わくり返る様な騒ぎ、中には隅田川の方へ通れようとしたものもあつたが、河岸の方は一帯に高い煉瓦塀が聳えてゐるので、長い梯子でもない限り、攀ち登ることも飛越えることも出来ない。電車通に近い方に居た人たちは、烈風に煽られる煙の熱さに堪えられず、煉瓦塀の方へひた押しに押しした。此の方は煉瓦塀の爲めに直接火の粉が被つて來ないので、せめてもといふ最後の期待を纔かに煉瓦塀の下にかけた群集心理であつた。

けれどもそれは遂に空しい期待であつた、三方から渦巻き來る大紅蓮に煽られ、避難者の荷物について廣場一ばいに廣がつた火とは、情け容赦もなく避難者を焼き捲つた。數分前までの安全地帯は今や阿鼻叫喚の一大修羅場と變つた、泣くもの、叫ぶもの、悲鳴を擧げるもの、親は子と呼び、子は親と呼び、夫婦兄弟互ひに呼び交して、離れまい助らうと

する最後の死に面した魂の力と叫びが、火焰の中に悶え苦しむ七轉八倒した。中には荷物と共に焼死するもの、逃げやうとして着物に火がつき全身焼け爛れて死するもの、廣場に燃え立つ焰の中は老若男女の死體で埋められた、煉瓦塀の方へ逃げた人たちも所詮助かることは出来なかつた。悲鳴を擧げつゝ逃げて行つては塀の下に打倒れた人の下に潜り、或は倒れた人の上に匍ひ上つて打倒れる、斯うして助からうとする幾万の人々が、後から後からと折重つて打倒れ、死體の下に潜り込んで押潰されたり、窒息したり、瞬く間に煉瓦塀に添ふて小山のやうに死體の山が出來た。そのうちに折重つて山のやうになつた人の着物に火がついたから堪つたものでない、忽ちのうちに着物は燃え、身體は燃え、生不動となり、數分間前の安全地帯は、忽ち黒焦死體の山と變つた。

此の被服廠跡の慘劇に黒焦げとなつた死體は、實に三萬二千餘といふ驚くべき多數で、僅かの水溜りへ身を潜めたり、人の死體の下に隠れたりしてまづたく九死に一生を得たものは、僅かに二三人位に過ぎなかつた。

七、相生署長責任の申譯に割腹し

● 猛火の中に飛込んで無惨の焼死

被服廠跡の慘劇については、幾多の悲話哀話と共に現されて居る。それらの詳細は別書『帝都震災悲話哀話』中に他のすべてのものと一括して詳述するが、其二三を挙げると、相生警察署の如き署員の大多数は、或は壓死、焼死、行方不明になつたが、山之内署長は警察署が猛火に包まれたにも拘はらず、身の危険を忘れ部下の署員を鼓舞激勵し、炎々たる猛火の中をがい潜りつゝ、避難民の救護に努力したが、何しろ旋風に渦巻きつゝ八方より襲ひ来る猛火は、すべての避難民を悉く安全地域に逃避させることは不可能であつたけれども數萬坪の廣さの被服廠跡だけは、まだ安全だつたので、署長は此處を屈強の安全地帯なれど、部下を督して潮の如く流れ来る住民を被服廠跡へ、被服廠跡へと避難

させた、ところが署長が最後まで安全地域だと思つた被服廠は遂に狂炎の一掃する所となつて、三萬餘の避難者をして黒焦の死體たらしむる悲惨な結果になつてしまつた。此の惨憺たる阿鼻叫喚の光景となるや、山之内署長は此の大惨劇の責任は當然自分にあるものとして、炎々たる狂炎の中に突立ち、帯剣を抜き放つて、我と我が腹部に柄も通れどばかりグサと突刺し、荒れ狂ふ炎の渦巻に焼かれつゝ、悲壯なる最後を遂げたといふ。多くの避難者は被服廠跡へ逃げさせた位であるから、無論署長は自分の妻子も此處に逃げさせて居たが、署長が自刃する前に既に其妻子は、多くの避難者と共に焼死して、傷ましい黒焦死體となつてゐたのであつた。そして署長の妻子の死體は、其後救護班の活動によつて始めて発見されたが署長の死體は遂に発見されなかつた。

八、天祐か地祐か被服廠跡で

奇蹟的に死線を越えた數人

今次の災害中最も慘鼻を極めた本所被服廠跡で、逃げ込んだ罹災民は、三萬四千餘人の多數であつたが、其中で天祐か地祐か辛くも焼死を免かれ、一命を拾ひ得たものは僅かに數人、他は悉く黒焦となつてむごたらしい慘死を遂げた。其の多數の慘死體の下敷となつて一命を助かつた相生警察署の原警部は、頭部其他全良に燒傷を負ひ、虫の息であつたのを救護班に助けられたが、漸く正氣に歸つた後、當時の状況について苦しい息も切れ／＼に「本所、深川の兩區が猛火に包まるゝや、兩區民のうち三萬五六千は家財道具と共に被服廠跡に避難して來ましたので、署からは山之内署長並に私が部下十八名を引率して警戒中、日暮れ頃には被服廠跡も三方から猛火に襲はれ始めたので、避難者は中へ中へと集ま

つた、すると猛烈な火焰は避難民の頭上に降り注いで來たので、必死になつて拂ひ落して居ると、一大旋風と共にまた／＼火は頭上に落下し、避難民全部は地に面をつけて防ぎ、さうした事を二三度繰返してゐるうちに、今までの悲鳴も叫喚も聞えなくなりました、それから後は一切夢中で何が何だか分からなくなりました。」と語つてゐる。此の一片の談話のみにも、當時の慘狀がまざまざと吾人の眼前に浮び來るではないか。

又一人の小僧は、漸く身を容れるだけの泥溝の中に這ひ込み、火の子が降り注ぐと泥水の中へ頭を突込み、苦しくなると顔を上げて呼吸し、又火の子が降つて來ると頭を泥溝の中へ突込み、危険の去る迄終夜それを、續けて居て辛くも助かつた。無論泥溝に這ひ込んだ人たちは其小僧一人ではなかつた、我先にと身を潜めた人は計へ切れないほどあつた、そして又其上に折重つて倒れた人も何百人となくあつたが、上になつた人は悉く焼死し、泥溝に這ひ込んだ他の人々は悉く泥水に頭を突込んだまゝ死んでゐた。

又他に兄弟二人助かつたのがあるが、それは、兄の方が少しばかりの水溜りのあるのを

見つけ、弟を引摺り込ひやうにして、水溜りの中に這込み、火焰の鎮まるまで、終夜泥水で頭や身體を濡らして助かつたが、火熱の爲めに身體にかけた水は忽ち乾いてしまふ。また頭や顔には間断なしに大小の火の粉が飛んで來るので、身體には絶えず泥水をかけて居なければならなかつた。又頭や顔も絶えず泥水を浴びたり、泥水の中に突込んだりして居なければならなかつた。其うちに弟の方は段々弱つて自分の身體に水をかけ、必死の努力を續けた。斯うしたので、兄の方は自分と弟と二人の身體や頭に水をかけ、必死の努力を續けた。斯うして漸く生命だけは助かつたものゝ、其水は泥水だつたはかりでなく、同様に這ひ込んだ多くの人々が焼死し、其の身體から湯の様な脂がドロ／＼流れ出て、それが混つて居た爲めに、ヤレ助かつたと思つた時は二人共目が見えなくなつて居た。然し人間の一心は恐ろしいもので、兄の方はまだいくらかボンヤリ視力があつたので、弟を助けつゝ隣接した安田邸の池まで辿りつき、池の水で目を洗つた、けれども矢張り視力は治らなかつた。弟の方はもうすつかり悲觀してしまつて、『私はもう駄目だから、兄さん一人逃げて下さい』とい

ふのを、兄は『死ぬなら一緒だ、これ迄助かつて此處で死んでは詰らないぢやないか』とぐた／＼になつた弟を助けつゝ電車通り迄逃げて行つた、すると通り掛りの避難者が附近の氷の倉庫に氷のあることを教へて呉れたので、兄は其處へ行つて氷を持って來た、そして二人の目を冷したり、嚙つたりしたが、見えなくなつた目は容易に治らなかつた。それを救護班に助けられたのだといふ。親を棄て兄弟を捨て妻子を見殺しにしても自分一人助からうとする者の多い斯ういふ凄惨な死線に遭遇しながら、死なば諸共最後まで手を取つて生さんとする兄弟の情義の、猛火以上に燃わた慘劇の中に哀れに咲いた唯一の美談、涙ぐましいほど聞く人の心を暖る事實さへある。

九、大火焰に舐められた兩國公園

數百の避難者折重つて焼死す

惨死した人の數こそ少いが、本所被服廠跡に於ける如き聞くも見るも無残な悲劇は、全市、到る處に起つた。あだかも日本橋區は最初の火の手が本石町方面に揚り、それが一方は鐵砲町から淺草橋方面に至る電車通りの兩側を焼き、一方は藥品問屋の密集する本町方面を焼き拂ひ、人形町方面の火の手と合して、濱町一帯を總舐めに舐め進み、又和泉橋方面の火の手は柳原河岸を襲ひつゝ、淺草橋方面に向ひ、淺草藏前方面の火も亦淺草橋方面に向つて盛んに狂暴しつゝあつた時、淺草橋、兩國橋の袂にある兩國公園には、あの附近の避難者が三四百人も集つた。いよ／＼周圍の家が火になれば、三萬坪もある被服廠跡さへも悉く焼死した位であるから千坪にも足らぬ公園とは名ばかりの猫額大の地、所詮黒焦

になつて焼死する外はない。早くみくら橋を渡つて逃ぐれば、上野公園なり日暮里なり、或は田端方面なりへ避難することが出来たのだが、避難者の多くが女子供であつたので、三方四方いづれを見ても炎々たる火焰と濛々たる黒煙の渦巻ならざるなき物凄光景を見ては、只もう怯む戦うのみであつた。そのうちに本石町鐵砲町小傳馬町横山町馬喰町方面からと、濱町方面からと、柳橋方面からとの三方面から、家財道具や商品などを満載した荷車や自動車などが續々と押寄せ、公園周圍の道路は、それらの荷物を満載した車でギツシリ詰つてしまつて身動きすることも出来なくなつた。兎角してゐるうちに火の手は益々近づいて、荷物の車は二進も三進も行かなくなつた。早くもそれを見た荷物を轆いて來た人々は我先に荷物を放棄つて逃げてしまつた。公園内の人々は目の前に猛火が迫つて來ても、道路一ぱいギツシリ詰つた荷車の爲めに逃げることも何うすることも出来なかつた。馬喰町一帯を總舐めに來た火は公園の一角に現はれ、忽ち三方火の海となり、アレヨアレヨと云ふ間に道路の荷物と云はず、公園内と云はず、強風に煽られた火の子は雨の如

く降り注ぎ、車に満載した荷物は一齊に燭と化し、避難者の持込んだ荷物にも火がついてしまつた、公園の樹木はバリ／＼／＼凄じい音を立て、枯草の如く燃えはじめた。無惨！無惨！、獨額大の公園は忽ち阿鼠叫喚の巷と化した。最初の間は燭と煙の中で親子兄弟互ひに名を呼び交す聲や悲鳴が、むごたらしく聞えて居たが、間もなくその悲鳴も衰へ、阿修羅の如き狂燭がすべての物を焼き盡した時は、焼け残りのものからチヨロ／＼と立ち上る燭の間に黒焦になつた無惨の死體が果々として横はつてゐるのみであつた。そして其中には親子夫婦兄弟しつかと抱き合つたまゝ、黒焦になつたものもあり、十人二十人折重つたまゝ、黒焦になつたものもあり、或は母親が二人の子供を胸に抱きしめ座つたまゝ、黒焦になつたものもあつて、慘鼻の極であつた。

一〇、不夜城の吉原火の海と化し

娼妓千餘の生靈水火に亡ぶ

淺草方面に於て、眞先に火の海となつたのは、帝都名物の一つ不夜場の新吉原であつたが、廊内居住者の多くが女であつたのと、廊内七箇所から一時に發火したのと、其の悲惨であつたことは名狀することの出来ないものであつた。殊に吉原は數年前の大火で全滅の苦しい経験を嘗め、其惨苦と恐ろしさとの記憶さへまだ消えやむ時であつた。けに、大激震によつて家屋倒潰し、同時に廊内所々に發火し、炎々たる火燭渦巻き上るや、廊内居住者の驚愕狼狽は言語に絶し、家財道具を持出す遣もなく、廊外に遁れんとして狂氣の如く駆け廻り走り廻り、殊に娼妓は彼等平生の習慣として、其頃はあだかも午睡の夢を食つて居た時分の事として、其驚きと狼狽は一通りでなく、悲鳴をあげつゝ、着のみ着の儘で飛

出すもの、階段から轉げ落ちて重傷を負ふもの、氣絶するもの、逃げようとして押潰されるもの、午睡の夢中に潰されたもの、或は驚きと恐怖に發狂するもの、二階から飛降りて惨死するもの、腰を抜かすもの、戸惑ひして柱や壁に衝突し氣絶するもの、或は卒倒するもの、或はマゴ／＼してゐる間に煙と燭に包まれて無惨の死焼を遂げるもの、或は廊内を逃げ廻つてゐるうちに逃場を失つて焼死するもの、或はあはて、火の方に逃げ却つて絶命となるもの、其の混亂、其の悲惨、不夜城の歡樂境は忽ちにして阿鼻叫喚の燒熱地獄となつた。

多くの人々は大門其他の非常口から土手の方へ逃げたり、龍泉寺町の方へ抜けて、上野、谷中、日暮里、王子方面に逃げたり、或は千住や荒川方面に避難したりしたが娼妓の千人数ばかりと其他の五百人ばかりは、廊の内外で水火の爲めに無惨の最後を遂げてしまつた。

一一、火に追はれた絶體絶命の千餘人

吉原公園の池忽ち死の池となる

廊内一面火の海と化し揚屋町、角町、京町一丁目二丁目の火に追はれた娼妓や新造や其の他の一千餘人は、雪崩の如く吉原病院側の吉原公園に逃げ込んだが、猛火は忽ちにして病院及、其の附近一帯に燃え移り、烈風は炎々天に沖する大火燭を吹きさらし、無数の火の粉は公園の全面に降り注いだ、群がる避難者は悲鳴をあげつ、千束町方面に逃げようとしたが、既に一圓の火に遮断され、龍泉寺町の方へ遁れようとしたが其の方面も既にすつかり火が廻つてゐた、あゝ已んぬる哉四面楚歌の聲ならぬ炎々たる猛火に包まる、而も病院方面からは情容救もなく火の粉火の風を吹きつけた。進むも火、退くも火、今や絶體絶命、最後の運命に到達してしまつた。死に面したすべての避難者からは一切の理性の魂が

三〇
脱け出てしまつた。池の周圍に居た者、橋の上に居た者は、火の粉火の風に堪らず、無我夢中で我先に池の中へ飛び込み、後から〜と飛び込んだ、何しろ池の深さは二尋以上もあつて而も其水は湯の如く熱し、それに火の雨火の風は眞上から益々激しく降り注ぎ吹きつけるのだから堪らない、飛び込む者飛び込む者悉く溺死し、忽ちのうちに池は折重つた千餘の死体で一ぱいになつてしまつた。飛び込みおくれた者や、着物に火のついた者などは、池の周圍に黒焦となつて惨死してしまつた。

一二、死の池に潜んで六時間の苦み

やつと助かつた者僅か四五十人

斯くて昨日までぞめきの人の夕涼み、樹蔭に涼風を浴びた吉原公園は、大震災と共に修羅の巷と化し、そよ吹く風に建立つた、池は忽ちにして千餘の生靈を呑んだ死の池とな

つたが、その溺死した千餘人の人々と共に火に追はれて絶体絶命、同様池に飛び込み、六時間程橋の下に潜み、漸やく助かつたものが四五十人あつた。其中の一人は酸鼻を極めた當時の状況を談つて曰く「あの恐ろしい大地震が起つたので、吉原公園に避難し、地震がをさまつたので荷物を出しに行かうとすると、あの角海老の四階建の大建物が燃へ上つてゐて、とても通ることが出来ないから、引返して裏門から廓外へ出ようとする、其處も既う火焔が渦を巻いてゐるので再び公園に引返した。其時は既に千人あまりの娼妓や其他の人々が避難して居たが、すぐ目の前の吉原病院が燃え出した。男の中には垣根を破つて千束町方面に辛くも通るゝものもあつたが、大部分は火炎の渦巻に包まれて池の中に我も我もと飛び込んだ、深さ二尋もあることとて、最後の悲鳴をあげて見る〜溺死してゆく、その上へ〜飛び込み、そも矢張り悲鳴をあげて溺死した。唯だ池中の棧橋の杭につかまつた者だけが助かつたのです、私もつかまつたがとても杭につかまる餘地がなくなり、捉まつてゐる者の肩に捉まり、それに又捉まりして、珠數なりになつて雨の如く降り注ぐ火の粉

の下に辛くも呼吸して居た苦しさを恐ろしさは、とてもお話することが出来ない。私にも二十人許の人がつかまつてゐたが、捉まつてゐる者が段々氣力が盡き果て、それに降り来る火の粉の爲めに頭や顔に火傷を負うて、後方から／＼と順々に溺死しだし、最後には私につかまつてゐた二十許りの中が僅かに三人となつてしまつた。それに吹きつける火熱は五分間おき位に水中に潜つて顔や頭を濡らさなければ、とても耐へられなかつた。六時間ばかりで吉原病院が焼け倒れてしまつたが、それでも一面火の海となつてゐて上ることが出来なかつた。最初から六時間してやつと匍ひ上つた、けれど前後左右いづれを見ても火の海は何處へ逃げることも出来なかつた。池中一ぱいの溺死体や池の周圍一面に累々たる黒焦死体をながめながら、またそこに六時間もゐますと、稍々火焰も衰へ初めたので、生き残つた四五十人と共に、火の中を潜りぬけ飛越まして、やつと千住大橋まで逃げのびそこでやつと助かつたといふ氣がついた位で、其の時、恐ろしかつた事や酸鼻を極めたことは、今思ひ出しても戦慄とします云々」と。以て當時の慘況を知ることが出来よう。

一二、渦巻く狂焰淺草公園に殺倒し

帝都唯一の遊樂境忽ちにして悉く燼滅す

十二階の崩落と共に起つた火災は、折からの風に煽り立てられて忽ち狂暴を逞ふし、見る／＼立ち並ぶ活動常設所を片つ端から舐め初めた。何さま土曜日でもあり各館いづれも一ぱい観客を入れ、一回の替りが終るか終らない頃だつたので、館内の混雑と悲鳴は非常なもので、客はいづれも總立ちとなつて騒ぎ階下普通席に居た客は雪崩を打つて館外に逃出し、階上の客は更に一層の恐怖に戦いて出口の階段を瀧の如く押おろし、轉落するもの踏潰されるもの、泣くもの叫ぶものそれが、階下の客と出口で一緒になり、怒號悲鳴、混亂は更に混亂を生み、悲鳴は悲鳴を生み、叫喚は更に叫喚を生み、表通りはなほ一層甚だしく、まるで煮えくり返るやうな騒ぎ、十二階が倒潰して盛んに燃えてゐるとか、吉原は

一面の火でそれが疾風の如く公園の方に押寄せてゐるとか、日本橋、京橋、神田一圓は火の海で、電車は全市とまつてしまつたとか、本所深川は全滅し、吾妻橋も落ちた、厩橋兩國橋の焼け落ちた、新大橋も永代橋も盛んに燃えてゐて、橋は全部渡れなくなつてしまつたとかいふ情報的な噂さは、なほ／＼混亂雜踏を甚だしからしめた。

湧き返る混亂雜闘の裡に、早くも活動館中の二三は辯士室の方から發火するものがあり、外觀は綺麗でも木造だから堪らない、まるで油紙に火のついた様に凄しい勢ひで燃え上り、一時間も経たないうちに活動館の立並ぶ一帯は狂焰の蹂躪する處となり、其火は四方に延び、千代田館、電気館、常盤座、金龍館、日本館を越めた火の手は、扇形に燃え廣がり、忽ち公園劇場を焼いて、區役所、傳法院方面から廣小路、俵町方面に進み、それが駒形町方面の火と合して、一層強烈となり、又西側一帯の常設館を焼いた焔は、田島町、柴崎町方面に延び、十二階方面から燃え進んだ。新谷町方面の火の手と合し、その右翼がまた吉原遊廓から出た龍泉寺町、千束町一帯の火の手と合し、左翼は東本願寺の巨宇を一抵

めに焼燼し、藏前方面から發した火の手と西鳥越町、東三筋町の線と合し、かくて鳥越三筋町、菊屋橋、合羽橋、入谷町、千束町、龍泉寺町を連ぬる一線、悉く火焔の巨浪となりそれが放射線状に擴大しつゝ、御徒町、上野、根岸、金杉方面にひた押しに押し進む、其の恐ろしいとも何とも言ひ様のない光景と、其の火の浪に迫はれて逃げ惑ふ幾十萬の避難民の混亂叫喚とは、只もう人々の心を無限の恐怖に戰慄させるのみであつた。

一三、淺草觀音の避難民十餘萬

猛火の嵐に包圍されて死線に立つ

一日の大激震と同時に發火した丸の内、本所、深川、吉原遊廓、京橋、日本橋方面は、其翌曉までに殆んど灰燼に歸したが、下谷、淺草等は翌二日か最も慘狀を極めた。淺草觀音の如きは、吉原及び公園六區の活動常設館が第一に猛火に包まれたにも拘はらず、其の

火の手が主として上谷方面から南千住方面に向つたので、其夜半までは、兎に角火焰の襲來を免かれてゐた。

然し、突風旋風の狂暴は更に益々猛火を煽り立て、二日の午前二時頃となるや、和泉橋、隅田川、下谷、千束町の四方面の火の手が向つた。観音堂附近は、樹木も多く、空地も多いので、火に追はれた避難民は、象潟、馬道、雷門、活動常設館方面の四方から雪崩の如く押寄せ、其の概數無量十五萬餘、荷物と人で身動きも出来なかつた。其の警戒に任じた象潟警察署は、火の手が益々近づいてまつた危険に陥つたので、この十五萬餘の避難者を如何にすればよいか困つた。上野方面に避難さすべきか、それとも其儘にしておくべきか、危険に瀕しても助かれればよいが、萬一観音堂に火がついたとなると、十五萬餘の人々は全部焼死する外はない。署長以下署員一同迷はざるを得なかつた。

併し危険漸く迫るや、避難民の一部は我先に上野方面に逃げ出した。それでも堂の周圍には十萬餘の避難者が密集して動かなくなつた。火の手は容赦なく進んで、仲見世も燃え初

めた、二天門外の馬道も火になつた、脊後も悉く火が廻つた、右の方も昆虫館、水族館を始め、附近一帯火焰に蔽はれ、大小の樹木は凄じい音を立て、枯柴の燃えるやうに燃え進んだ、十萬餘の避難者は堂を中心として押寄り押寄り、一塊りになつて生きた心地もなくいよいよ最後まで観念して瞑目合掌するもの、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と聲を限りに題目を唱へるもの、或は南無大悲大悲の觀世音、助け給へ助け給へと觀音を念ずるもの、或ひは親子兄弟死なば諸共と確かと手を握り合つて最後の運命を待つもの、或は夫婦相擁して焼死を覺悟するもの、或は火の粉を避けるために、座蒲團や合羽や毛布や外套を被るもの、或は堂の床下に這込むもの、泣くもの、叫ぶもの、あゝいよいよ最後の時が来たと思はれた、殊に火の粉は雨の如く降り注ぎ、火の如き熱風は四方から襲ひ来る。こゝで大旋風が捲起れば所詮助かることは出来なかつたが、十萬餘人の熱誠が天に通じたか、それとも觀音様の御利益か、火勢は段々衰へて行つて、本堂、五重塔、二天門、仁王門には火がつかずに済んだ。斯くて十萬餘の人々は初めて甦つた思ひをしたが、淺草区内で焼け残

つたのは、この観音堂と樂天地の一部位のものであつた。かうして帝都名物の淺草活動常設館及び附近一帶の殷賑を極めた街々は悉く一望焦土と化してしまつた。

一四、花屋敷の動物多くは射殺又は焼殺され

助かつたのは子虎、熊、象、猿、水禽のみ

淺草公園六區の活動館猛火に包まるゝや、猛獸其他多くの動物を抱へた花屋敷では、多くの動物を悉く避難させることは到底不可能であり、猛獸の如きは、一朝脱逸した場合どんな椿事を出來するやも知れないといふ處から、過般子を生んだ親虎二頭其他の猛獸類はピストルで射殺し、子虎六頭、象、水禽の一部だけを観音堂前の五重の塔の下に避難させ、その他は悉く焼けるにまかせたので、大部分は無残に焼け死んでしまつたが、鹿二頭、熊五頭、猿十數頭、その他水禽類は、檻の中の水潜りに隨つて居たので、熊一頭を除く外

は皆たすかつた。又一羽の鷺は檻が焼けると同時に、中空高く逃げのびたが、七日午前鎮火すると同時に舞ひ戻つて來たといふ悲惨の中にも、彼等動物が火災に對する避難法が、人間のそれと殆んど同様な方法を取るものであることを語る興味ある事實もあつた。

一五、罹災民五十餘萬上野公園に集中し

全山悉く人と荷物を以て埋る

全都一度火の海と化するや、修羅場の如き大混亂の裡にも、百萬の罹災民は或は芝公園に、或は日比谷公園に、或は宮城前の廣場に、或は目黒、新宿、大久保、戸塚、大崎方面へ、或は四谷、牛込、小石川方面へ、或は北千住、荒川、隅田、寺島、龜戸、大島等の郡部へ、或は上野、日暮里、田端方面へ、續々と避難したが、中にも上野公園は本所、深川の罹災民の一部、及淺草、下谷、神田、日本橋方面の罹災民の大半が押し寄せたので、其混

亂は實に名状すべからざるもので、西郷銅像附近の廣場から、竹の臺附近の廣場、博物館美術學校、動物園の内外は勿論、圖書館附近から徳川靈廟附近、新坂上の廣場から淺雲橋附近、輪王子門跡の内外、東照宮、精養軒附近から谷中天王子の墓地、御隠殿坂上附近、寛永寺の内外に至るまで、數十萬坪の上野の山は、人と荷物を以て充ち満ち、道路も樹の下も建物の中も、苟も人や物を容るゝに足る處は足の踏むところもない位で、その數無量五十餘萬の多きに達した。

一六、日比谷芝公園に集る罹災民

數十萬人ごつた返す修羅公園となる

上野公園に次いで避難者の最も多く集つたのは、日比谷と芝兩公園であつた。日比谷公園は主として京橋區及び京橋區に接した麴町區内の罹災民であつたが、芝公園は日比谷以

上に安全地帯だと思はれたので、芝區内の罹災民は勿論、京橋、日本橋、麴町區内の罹災者が續々避難して來たので、廣場から森の中、増上寺の内外はそれ等數十萬の避難者と荷物でごつた返し、まるで修羅公園の狀を呈した。

一七、大小劇場殆んど悉く灰燼に歸し

残るはわづかに南座と末廣座

ブルジョア劇場、贅澤劇場、高等劇場の總本山であつた丸の内帝國劇場も、警視廳の火の手を受けて輪換の美を盡した内部は悉く灰となり、只だ外廓だけが廢墟の如く残つて居るばかり、有樂座も焼け、歌舞伎座も焼け、新富、市村、明治、開盛、本郷御國の各座も皆な焼土となつた。神田、中央、駒形、公園等の各劇場も燼滅し、只だ僅かに麻布十番の南座と末廣座の二座だけが、潰れもせず焼けもしないでゐるばかり、其の他は大小數十

悉く焼けて灰と土になつてしまつた。

一八、三越を始めデパートメントストア全部焼け

其他の大商店大會社も全滅

猛火の襲ふ處狂爛の行く處、何者も焼き盡し舐め盡さずんば已まなかつた。日本橋畔駿河町の一角に老大なる雄姿を聳かし、東洋第一の大デパートメントストアを以て誇り、日々十數萬の客を吞吐し、東洋第一の般賑繁昌を極めた三越も、只だ外廓を残すのみで、内部の商品も設備も悉く焼けてしまつた。三越に次いで盛大を謳はれた白木屋も灰となつた。高島屋も焼け、松屋も焼け、上野廣小路の松坂屋も烏有に歸し、デパートメントストアと名のつくものは一つも残らず焼けてしまつた、松坂屋の如きは、一時焼け残つて居たが、何でも自動車飛ばして來た不逞漢が、窓から爆弾を投げ込んだために、焼け残つ

た喜びは束の間、哀れ狂爛の舐め盡す所となつたといふ。然らば噂は全市到る處にあつて、現にそれを見たといふ人さへあるが、果して事實であるかそれとも所謂流言蜚語であらうと茲には疑問のまゝに傳へて置く。

其他銀座や日本橋通りは勿論、神田、本郷、下谷、淺草、本所、深川、芝などにあつた大商店大會社も焼失してしまつた。

一九、ビルディングもすべて或は焼失

或は潰れ或は大慘害を蒙る

丸の内、郵船、海上、第一、相互館等の大ビルディングを始め、丸の内、京橋區、日本橋區其他今度の罹災各區にあつた大小のビルディングは悉く焼失或は崩潰或は一部破壊等の大慘害を蒙つた。三菱地所部が一千萬圓の巨費を投じて、先般漸く落成開館したばかり

の丸の内ビルディング及び海上、郵船の各ビルディングは、幸ひにして倒潰も火災も免かれ、一人の犠牲者も出さなかつたけれども、内外部に幾多の大龜裂或は部分的崩落個所を生じた。郵船ビルの隣に建築中であつた内外ビルの如きはどかりと一時に潰れ、百五十人からの人々が生埋めになり、而も其中には足や手を挟まれたり、或は幸ひ空隙部分に閉込められたりして居る生存者が、悲鳴をあげて助けを求むる聲は實に悲愴たるものであつた。

京橋畔に雄姿を見せて居た第一相互館も外廊だけ残つて内部は悉く焼失し、出来上つたばかりだつた長岡ビルディングも残つたものは外部だけ、其他日米ビルディングも焼けた。建築中であつた千代田及國光生命保險會社の各ビルディングも焼けた。丸の内、海上、郵船等の被害の少かつたビルディングでは、應急修理の上近く開館することも出来やうが、丸焼け半焼けになつたもの、又は丸潰れ半潰れになつたものは、全然建築をやりなほさなければならぬ。それは果していづれの日であらうか。

二〇、水道破壊し消防不可能

只だ焼けるに任せるのみ

最初の大激震によつて、水道の鐵管が破壊しなかつたならば、或は斯程の惨害はなかつたかも知れぬ、もつと部分的區域で喰止めることが出来たかも知れぬが、水道の鐵管が最切の激震で破壊した爲め、何十臺のポンプはあつても、何百條のホースはあつても、氷のない氷囊と同様、何の役にも立たなかつた。それでも最初の間は、全市の消防署は必死の活動を續けた。然し段々水道は枯れて来て後には一滴の水も出なくなつた、それに消防手の大部分が、或は惨死し、或は通路を斷たれ、或は家族の避難などで、平生の三分の一も出なかつたばかりでなく、全市七十六個所に起つた火災は、瞬く間に凄じい黒煙と火焔は天に押し、數丁數十丁に亘つて燃え廣がつて行く猛火の勢ひは、二十臺や三十臺のボ

ンプが束になつてかゝつても、到底喰ひ止め得るものではなかつた。さうした事情からポンプはあつても水が乏しく、人員がなく、又水あり人ありポンプはあつても猛火の勢、颶風の如しで、如何とも策の施しやうなく、只だ燃ゆるにまかせ焼けるまゝに打棄て、おく外はなかつた。随つて出火の数は一日より二日、二日より三日と、漸次多くなり、三日間の出火總数は八十八ヶ所、其中消し止めたのは僅か二十三ヶ所に過ぎなかつた。中には猛火の爲めに包圍された自動車ポンプが、消防中に焼かれてしまつたのさへあつた。

二一、流言蜚語盛んに行はれ

人心恟々として不安其極に達す

かゝる慘憺たる裡に、流言蜚語盛んに行はれ、或は鮮人三千川口町方面から襲來しつゝ、ありとか、千住方面では鮮人數百の一團が強盜強姦虐殺を行ひつゝありとか、或は焼残りの

部分や避難者の集合する處の井戸に鮮人が毒藥を投入しつゝありとか、或は玉川砂利運搬に従事してゐた七八十名の鮮人が二手に分れ、一團は目黒方面の避難民を襲ひ、掠奪強姦殺人を恣まにしてゐるとか、或は目黒の火藥庫を襲撃し、警備の軍隊と衝突したとか、或は避難民の如く装ふた鮮人が、ビール瓶などに石油を入れ、焼残りの民家に放火しつゝあるとか、さういふものが何處の警察には何十人捕縛されたとか、何人殺されたとか、或は社會主義者と鮮人が結託して東京全部の焼拂ひを企て、爆彈を投じたり、石油などで放火をして居るとか、社會主義者と數千の鮮人とが二手に分れ、一團は東京焼拂ひに従事し他の一團は東海道を大阪方面に西下し、途々主要の部分や村落を焼拂ひつゝありとか、或は又⊕とか⊙とかの印を白墨其他で殘残りの人家の塀などにつけるものがあるが、それは鮮人と社會主義者の行爲で、⊕は此處に井戸あり毒藥を投入せよの意であり、⊙は丸焼にせよの意味で、この印をつけたあとから實行團が其印のある處の井戸に毒藥を投入したり或は爆彈を投じたり放火をしたりするのだとか、東京横濱は全部監獄を開放して一切の囚

人を逃がしたが、その囚人が掠奪、強盗、強姦、殺人、放火を行ひつゝありとか、或は埼玉縣では何百人の不逞鮮人を殺したとか、神奈川縣下でも數百人の不逞鮮人や社會主義者を殺したとか、其他いろ／＼の流言蜚語が盛んに行はれた。そしてさういふ流言蜚語は、大震災の第一日の夜から行はれ始め、二日、三日、四日と日の經つに従つて益々甚だしくなり、日夜人心恟々として罹災民も非罹災民も不安と動搖の極に達し、食物はあつても咽喉を通らなかつたのである。

四八

二二、大慘劇中に山本内閣成立し

戒嚴令布かれ軍隊續々入京

帝都の大半火の海と化し、天空全く煙と火の粉を以て蔽ひ盡された九月二日、かねて閣員詮衡中であつた山本内閣は即時成立し、直に新任式が行はれたが、其顔振は首相兼外務

大臣伯爵山本權兵衛、内務大臣子爵後藤新平、逓信大臣兼文部大臣犬養毅、鐵道大臣山内一太、農商務大臣兼司法大臣男爵田健治郎、大藏大臣井上準之助、陸軍大臣男爵田中義一、海軍大臣財部彪であつた。次で六日になつて専任司法大臣には大審院長平沼麒一郎、文部大臣には岡野敬次郎博士親任せられた。

斯くて内閣成立するや、直に東京府神奈川縣に戒嚴令を布き、關東戒嚴司令官には福田雅太郎大將が任命され、其の旗下に屬する軍隊は續々入京し、嚴重なる警戒の下に秩序維持と人心の安全とに努めた結果、人心稍や安靜に向いたが、それでもなほ流言蜚語は盛んに行はれた、其の最も甚だしかつたのは二日から七八日頃まで、其間は軍隊や警察から何う注意しても、一般人心は流言蜚語に迷はされ、恟々として安んじなかつた。處によつては地震よりも火災よりも鮮人が徒黨を組んで押寄せ、掠奪強姦殺人を行ふとか爆彈を投ずるとかいふ浮説の方に、より恐怖し戦慄した處もあつた位であつた。殊に其の流言浮説に多くの人迷はされ恐れ戦いたのは、さういふ現場を見たとか、何處の誰某が實見した

とかいふやうなことが、最も興つて力あつたのであつた。

無論それが流言蜚語で、信ずるに足らぬものであつたのは、鮮人が爆弾を持つて居るといふので、警察や軍隊で捕へて見るとそれは林檎であつたとか、食品の罐詰であつたなどといふ事ろ滑稽な事實によつて想像することが出来るが、然し一部の不逞鮮人が混亂に乗じて悪事を働いたことや、社会主義者の宣傳が主なるものであつたことは、戒嚴令が布かれ、警戒が嚴重になるに従つて漸次判明した。それは戒嚴司令部で發表して居る事によつて明らかであるが、三日以後軍隊と警察と民間の自衛團との協力活動によつて、然ういふ不逞の徒は大體獵り盡すことが出来た。

二三、焼失戸數四十一萬一千餘

罹災民百五十四萬餘

かくて帝都大東京は、未曾有の大激震によつて、忽ち其大半火の海となり、火の風、火の雨、火の嵐の帝都となり、阿鼻叫喚の焦熱地獄となり、僅々十有八時間にして荏々一圓の焼野原と化し、一切の交通機關、通信機關全く途絶し、燈火なく家なく食なく衣なく水なく、混亂と酸鼻を極めたが、而も今回の大震大火に於て幾何の災害を蒙つたか、先づ其焼失戸數と罹災民數について調べて見ると、警視廳の發表する所によれば、焼失戸數三十一萬六千〇八十七戸、罹災民數百三十五萬六千七百四十人であるが、東京市調査課の精密に調査した處によると、焼失家屋戸數は四十一萬一千〇三十五戸で、焼失町内に住居して居た罹災民數は百五十四萬七千三百五十一人であつた、區別に内譯すると左の通りである

區別	焼失戸數	罹災民數
麴町	二、七九二	一二、五六〇
神田	四五、九五二	一六二、九八九
日本橋	二六、〇七七	一五二、三二六

京橋	五〇、七四九	一五八、四八〇
芝	一六、二七八	七二、四二九
赤坂	三、八五一	一六、七八七
四谷	一、六〇四	六、四九四
小石川	一、三六五	四、四三二
本郷	八、七九〇	三〇、〇三五
下谷	四八、〇七〇	一七一、九八六
淺草	八一、八七二	二八四、二九六
本所	七四、五八九	二七七、四五九
深川	四九、〇四七	一九七、〇七八
合計	四二二、〇三五	一、五四七、三五一

二四、焼失したる主なる各區の建築物

其損害實に十億圓

東京の中心丸の内、京橋、日本橋區を始め全燒區六、殆んど全燒に近き區二、半燒區一、而もそれが商工業地域であつただけに、代表的大建築物は殆んど悉く焼失し、焼け残りの麴町區内に残つて居るものを除く外は、皆二流以下の建物である。焼失した主なる建築物を列記すれば

- ◇麴町區——大藏省、内務省、印刷局、專賣局、特許局、佛國大使館、會計検査院、警察練習所、麴町及び日比谷兩警察署、帝國劇場、警視廳、日比谷大神宮、中央郵便局、東京電燈會社、中央電話局、有樂座、飯田町驛、有樂町驛、國學院大學、日本齒科醫專、麴町高等女學校、虎の門女學院、伊井伯爵邸其他

◆神田區——松屋吳服店、東京瓦斯會社、商科大學、中央、明治、日本專修各大學、女子職業學校、東京齒科醫專外各小學校、金杉、濱、井上各眼科外各病院、入道館外五活動寫真館、日本石油會社、萬世驛、錦町警察署、明治青年兩會館。

◆日本橋區——日本銀行、村井銀行、森村銀行、東海、第百、第一、第三、安田、川崎各銀行、株式、米穀兩取引所、三越、白木屋、明治座、日本橋俱樂部、中外商業新報社、日本橋高小學校、中央電信局、久松、堀留、新場橋三警察署、濱町、矢の倉病院外十七ヶ所。

◆京橋區——星製藥、千代田生命、第一相互館、築地活版所、第十五銀行、高島屋、服部時計店、朝日、時事、國民、萬朝、讀賣、中央各新聞社、精養軒、歌舞伎座、新富座、農商務省、遞信省、月島海軍造船所、林セントラル外十六病院。

◆芝區——新橋驛、慈惠院大學、鐵道病院外八病院、神明社外六社、青松寺外四十七寺院、濱松町電氣局、其他。

◆赤坂區——米國大使館、大倉男邸、其他。

◆四谷區——新宿市電車庫、活動寫真館二。

◆小石川區——砲兵工廠、傳通院、其他。

◆本郷區——帝大一部、女子高師、岡野文相邸、松平頼壽伯、上杉伯邸、本郷座、寺院四

◆下谷區——岩倉鐵道學校、上野高女外十一校、市村座、日野病院、活動寫真館三、上野

驛、區役所、上野坂本兩警察署、松坂屋吳服店、下谷郵便局、常盤花壇、下谷電話交換

局其他。

◆淺草區——商工外小學校十五、樂山堂外七病院、七軒町、象潟、日本堤、南元町の四警

察署、東本願寺外寺院全部、花屋敷、六區其他の活動寫真館全部、中央、公園、駒形、

御國座其他劇場全部、吉原遊廓全部、馬道郵便局其他銀行會社全部。

◆本所區——相生、原庭、大平の三警察署、陸軍糧秣廠、安田別底、國伎館、回向院、第

三府立中學、其他。

◆深川區——西平野、洲崎、扇橋の三警察署、岩崎別邸、洲崎遊廓全部、商船學校外十一小學校、淺野セメント外大工場十二等であるが、其損害は實に數十億圓といふ驚くべき大損害である。

二五、帝都の慘死者は二十萬以上

傷病者の數五十餘萬人

未曾有の大惨害は、單に帝都の大半を野焼原たらしめたのみでなく、數百萬の巨費を投じた大建築物が悉く焼失崩潰したのみでなく、再び復舊することの出来ない幾多の人命が火焰の中に犠牲となつたことは、悲みても餘りある痛恨事であり忘るゝことの出来ない悲惨事である。最初其慘死者は全市を通じて約十萬内外であらう、或は六七萬程度であるかも知れぬと思はれてゐたが、本所の被服廠跡だけでも三萬四千以上であり、吉原遊廓でも

千五百人からの慘死者を出して居り、其他百、二百と一塊りになつた黒焦死体は市内到處にあつて、今日迄發見されたものだけでも既に十二萬人以上に達して居る。然しまだ隅田川に墜落溺死した者は其以外であり、其他家屋の下敷となつて壓死或は焼死して居る者路傍に黒焦となつて倒れて居る死體などが、今後どれだけ發見されるか知れないので、それらを發掘收容したら、恐らく二十萬を突破する見込みである。

又傷病者の數に至つては更に夥しいもので、九日警視廳の發表する處によれば、同廳衛生部では日比谷第一中學、芝三田慶應大學内、府立第五中學、其他全市に亘り四十一ヶ所の救療所と五十四班の救護班の外、廻自動車診療隊三隊、傳染病に對する防疫班三隊、總人員三千、それに隣縣各地から上京した約四千人の救護隊を指揮して、傷病者の手當防疫並に死體焼却等に大活動を續けて居るが、八日迄に取扱つた傷病者の數は實に五十萬以上に達し、傳染病患者の如き駒込病院滿員の爲め府下大久保の避病院に收容したが、尙續續發生しつゝあるので、同廳では市と協議の上市郡十六ヶ所にバラツク式の傳染病院を建

築することに決定し、目下其準備に忙殺されてゐる有様で、今月中には恐らく百萬を突破するであらうと言はれてゐる。

二六、死者は日露戦死者の二倍

損害は實に其約七倍

前述の如く死者は東京市だけで二十萬を突破するだらうといふ見込みで、又建物其他の總損害は五十億圓と百億圓と二百億圓の三様の見込説があるが、百億圓説が最も妥當であらうと言はれてゐる。之を明治卅七八年の日露戦争の戦死者數と總損害に較べると、日露戦争の戦死者は十一萬八千餘名、損害は陸海軍を合して十五億二千三百二十一萬四千二百〇九圓であつたのであるから、今次震災の死者の數は其二倍、損害に於ては約七倍額である。

二七、客車貨車の焼失無量九百輛
貨物の焼燼亦た五千餘噸

今回の震災に於ける鐵道の被害損失は實に莫大なもので、建物として全焼したものは東京では鐵道省を始め新橋運輸事務所、新橋驛、有樂町驛、濱松町驛、萬世橋驛、神田驛、お茶の水驛、水道橋驛、上野驛、兩國驛、飯田町驛、錦糸町驛、横濱では横濱驛、櫻木町驛等で、其他倒潰したものでは牛込驛を筆頭として數十驛に及んだ。随つて火災の爲めに焼失した客車貨車の數も夥しいもので、鐵道省焼失と共に其裏手の東京驛構内にあつた東海道線の客車四十五輛焼失した外、新橋運輸事務所管内の客車十七輛、貨車二百五十輛、上野運輸事務所管内の客車百六十九輛、貨車二百五十六輛、兩國運輸事務所管内の焼失客車八十六輛、貨車五十三輛、その他不明の者數十輛、合計無量九百輛の多きに達した。

中にも田町附近にあつた急行六列車の如きは汐留官舎焼失の爲め職員の荷物を満載したま
ま全部烏有に歸した。就中貨物の損害は財界不況の折柄として、非常な損害額に上り、其焼
失は汐留驛の貨物約二千噸、飯田町驛の九百噸、兩國驛の二百五十噸、秋葉ヶ原驛千五百
噸、横濱驛の八百噸、合計五千餘噸に達した。殊に各建築中工事に關する設計圖や調査や
材料が全部焼失した結果、新たに實地踏査をした上改めて設計をやりかへなければならな
くなつた。随つて其方面の回復だけでも今後數年を要する見込みである。

關東大震大火記 (東京篇終)

大正十二年十二月廿四日印刷
大正十二年十二月廿七日發行

關東大震大火實記奥附
定價金四拾錢

著作權
所有

發行所

東京市本郷區駒込
動坂町百〇九番地

帝都復興協會

發行者 帝都復興協會

代表 樋口紋太

發行者 樋口紋太

東京市本郷區駒込動坂町百九
番地 電話小石川(六三六〇)

印刷人 久末博

印刷所 帝都復興協會印刷所

東京市本郷區駒込動坂町百九番地



終